

氏名(本籍地)	岩見 広一 (北海道)		
学位の種類	博士(社会心理学)		
報告・学位記番号	乙第219号(乙心第1号)		
学位記授与の日付	平成29年3月3日		
学位記授与の要件	本学学位規程第3条第2項該当		
学位論文題目	わが国の凶悪犯罪に対する犯罪者プロファイリングの総合的な分析手法の開発 —社会心理学的視点による研究と実務の融合を目指して—		
論文審査委員	主査 教授	博士(学術)	桐生 正幸
	副査 教授	文学博士	安藤 清志
	副査 教授		堀毛 一也
	副査 東京未来大学教授		大坊 郁夫

【論文審査結果】

東洋大学大学院社会学研究科(社会心理学専攻)に、博士学位論文として提出された岩見広一(いわみひろかず)氏の博士(乙)論文「わが国の凶悪犯罪に対する犯罪者プロファイリングの総合的な分析手法の開発—社会心理学的視点による研究と実務の融合を目指して—」について、以下のように論文審査を行ったので報告する。

本論文は、社会心理学の視点から、わが国の凶悪事件に対する犯罪者プロファイリングについて、人間の行動及び人物属性の推定に関する研究と実務との関連性、さらに現実の犯罪捜査環境に対応させ、犯人検挙に必要な手法として成立させること目指し検討したものである。

犯罪者プロファイリングは、「犯行現場の状況、犯行の手段、被害者等に関する情報や資料を、統計データや心理学的手法を用い、また情報分析支援システム等を活用して分析・評価し、犯行の連続性の推定、犯人の年齢層、生活様式、職業、前歴、居住地等の推定や次回の犯行を予測するもの」と定義されている(警察庁、2014)。わが国において、犯罪者プロファイリングの研究が本格的に始まったのは約20年前(1994年)のことであり、捜査現場における実務の試行が本格的に始まったのは約15年前のことである。それゆえ、わが国における犯罪者プロファイリングに関する研究と実務の歴史は、それほど長いもの

ではない。こうした背景を顧みると、犯罪者プロファイリングの総合的な分析手法の開発と捜査現場における効果的な活用という実社会への適用について考えることが不可欠となる。その際に、社会心理学的な視点における犯罪者プロファイリングの位置づけについて焦点を当てることは、非常に重要と考えられる。言い換えれば、本論文は、実社会で生じている問題を解決するために、新たな問題解決手法を導入し、従来の問題解決過程の一部の機能として成立させていく長期の過程に関する研究例とも表現できる。

犯罪は、犯罪者と被害者、犯罪者と環境との相互作用として表現される社会的行動であり、これら相互作用には必ず時間と場所という状況要因が関係する。犯人像等を推定する過程では、社会的認知という概念が重要な役割を果たしている。また、犯罪捜査は、捜査に携わる者と犯罪者、被害関係者、関係する捜査員、関係する組織、環境との相互作用と表現できる集団による社会的行動であり、これにも相互作用が生じた時期、捜査の進捗状況等の時系列的な状況要因が重要となる。

以下、本論文の章立てに従い内容を示していく。

まず第1章では本論文の目的と構成について、第2章では社会心理学における犯罪の位置づけについて、第3章では犯罪者プロファイリングにおける社会心理学の役割について、それぞれ述べている。犯罪者プロファイリングと社会心理学の関連性について、先行研究などを踏まえ深い検討が行われている。

次に、第4章では、わが国の実務に必要な研究課題の明確化をテーマに、連続窃盗事件に対する分析事例と検証を行っている。ここでは研究1として、わが国の犯罪者プロファイリングにおいて、実務上必要となる事例研究を報告している。社会心理学的な視点では、研究1の取り組みはフィールドワークに当たり、研究スタイルはアクション・リサーチのスタートラインに当たると考えられる。同研究は、わが国で犯罪者プロファイリングの実務が公式に始まる前に行われたパイロット的存在であり、研究2以降への各研究へと波及している。

第5章では、発生頻度が低い凶悪犯罪の研究（研究2から研究6）が報告されている。

研究2は性的殺人、研究3は放火殺人、研究4は司法機関を対象にした放火、研究5は同一場所への再犯行を伴う性犯罪、研究6は女性単独犯によるコンビニ強盗である。研究2及び研究3では、数量化Ⅲ類、対数線形モデル分析等の統計的手法を用いた。犯行形態の類型と犯人特徴との間に連関が認められ、犯行行動等から犯人像の属性推論が可能であることが示唆された。また、両研究において連関が認められなかった変数も共通しており、犯人の年代、職業は、犯行現場における犯人の選択行動から推定することが困難であることが示された。研究4は基礎統計量に基づいており、特異な放火事件においては、犯行動機の特定が犯人の絞り込みに有効であることが示唆された。それに伴い、捜査対象者は、

被害者等の関係者捜査によって絞り込める可能性が認められた。研究5は、基礎統計量に基づいている。同一場所における再犯行、再々犯行における時間帯の一貫性は、それぞれ8割弱、9割と非常に高く、再犯行が同一建物の場合が約9割となった。これらの時空間的特性に基づき、犯人を発見する捜査支援が可能であると考えられた。研究6は、単純な統計的集計では研究対象となりにくいマイノリティな犯人を対象とし、決定木分析によって犯罪経歴や犯行移動距離に影響を与える事件特徴が示唆された。

第6章では、発生頻度が高い凶悪犯罪の研究（研究7から研究9）が報告されている。研究7は金融機関強盗単独犯による事件、研究8は犯罪パターンに基づく性犯罪の犯罪経歴推定方法、研究9は犯罪手口に基づく被疑者順位づけシステムを用いた性犯罪における犯人像推定方法に関するものである。研究7では、決定木分析等の統計的手法を用いた。犯人の移動能力の高さや複数の移動手段の使用が、事件解決までの期間に影響を及ぼし、犯人の移動手段及び主要な犯罪経歴の識別には、特定の事件特徴が関連していることが示唆された。研究8と研究9は、ともに類似する事件特徴に基づく犯人属性の推定方法に該当する。前者が決定木分析による犯罪パターンに基づくものであり、後者は犯罪手口の選択確率に基づくものである。後者は上位に順位づけられた推定すべき犯人特徴の比率に基づき、その犯人属性の有無を推定する方法であるが、分析対象の事件とどの事件特徴が具体的に類似しているかはブラックボックスとなっており、見た目では判断できないという欠点がある。前者はその点については容易に視認可能であり、実務的には決定木分析による推定のほうが、現場捜査員にも説明しやすいといえよう。双方の研究とも、上位ランキング群の抽出段階や決定木の深度設定によって識別率が変動したが、推定的中率は比較的高かった。

第7章では、犯罪者に関する地理的領域の研究、あるいは犯行に関する行動圏の研究（研究10及び研究11）が報告されている。研究10は連続コンビニ強盗犯の犯人像と居住圏の関係について検討、研究11は性犯罪における連続犯の点分布パターン分析の精度を比較したものである。研究10では、サークル仮説や疑惑領域等の拠点推定モデルにおける犯人の居住率は、犯行時間、都市規模、犯行件数、拠点推定モデル半径の違いの影響を受けていることが示唆された。研究11では、わが国の警察において点分布パターンの地理空間分析として一般的に利用されているサークル仮説、疑惑領域を含め、9種類の地理空間分析から検出された領域について、犯人の地理的な捜査領域への適用度を検証した。犯人の拠点推定としては、犯人の移動範囲をより反映したSD楕円、2SD楕円が、後の犯行地予測としては、狭域かつ発生率が高いカーネル密度推定の等高線および最近隣2SD楕円が捜査上の利用価値が高いと考えられた。

これら研究1から研究11においては、それぞれ犯行行動等と犯人属性との関連を検討することが目的であり、一連の研究において概ね両者の間に対応関係が認められることが

示された。なお、各章における研究における著書及び論文などを、末尾に記したので参照されたい。

犯罪者プロファイリングの分野では、両者に対応関係を仮定することを相同仮説と呼ぶ。社会心理学的な観点からは、人間の行動等から犯人属性が推論可能な属性推論に関する実証研究としてとらえることが可能であろう。一連の研究の流れは、実証的なヒューリスティックである推定規則の蓄積といえる。しかしながら、実証的なヒューリスティックであっても、現実場面においては共変関係を支持する推定規則が適用できない反証ケースが必ず存在する。そのため、推定規則の適用の限界を踏まえながら、研究知見を運用しなければならない。幸いにも、実務においては、共変関係に関する研究知見だけではなく、個別事件毎の発生事件情報があり、現場観察等によって客観性の高い認知資源が存在する。すなわち、現実場面では、認知資源を利用したシステムティックな処理も同時に実施され、より正しい推論に務めている。また、社会心理学の立場では、犯罪者プロファイリングの分析手法のうち、統計分析はカテゴリー依存型処理に、事例分析はピースミール処理にという2過程理論によっても説明できよう。

社会心理学の視点では、実務的手法の開発は、単一の学問領域だけでは完結せず、複数の学範を融合して、実社会の問題を解決しようとするモードⅡ科学、あるいは、心理職以外の職業層との異業種交流といった概念が不可欠である。そして、新規事業の一般化には、心理職自ら現場と関わっていき、心理職と捜査員という共通言語に乏しい異業種間の共同知の蓄積が必要と考えられる。さらに、推定結果を実際の犯罪捜査へ活用するためには、単なる推論結果の提出ではなく、実際の捜査活動に反映させる働きかけが必要である。社会心理学の視点では、組織的な捜査に反映させるために、分析者と捜査員の紐帯、さらに捜査員間の紐帯を結ぶソーシャル・ネットワークへ働きかけ、捜査全体を結束させるネットワークとして強化していく配慮が重要であろう。

以上のことから、本論文では、犯罪者プロファイリングにおける犯人属性等の各種推定、推定結果を犯罪捜査に活用するための方略といった一連の過程では、随所に社会心理学的な視点が重要不可欠であることが指摘できたと考えられよう。また、「犯人検挙の意思決定に役立つ総合的な分析手法」として犯罪者プロファイリングを機能させるため、分析者もしくは分析チームと、捜査員もしくは捜査陣という対人関係や集団関係という研究テーマに焦点を当てた社会心理学の観点が、今後極めて、重要かつ不可欠となることも示唆された。以上のような観点から考察した犯罪者プロファイリング研究は、わが国においてまだ見当たらず、実務的な技法の開発も含め、本論文の独創性及び研究価値が十分にあるものと高く評価されたところである。

なお、口述試験において社会心理学に関する専門知識を十分有していることを確認した。また、本論文の冒頭に記載してある英語要旨が適切であることも確認された。

以上、本論文は優れた内容であると同時に、社会学研究科学学位請求論文審査内規（2013年4月15日承認、社会学研究科委員会）に照らし合わせ、岩見氏の学位請求のための博士（乙）論文は、妥当な研究内容であると認められた。よって、所定の試験結果と論文評価に基づき、本審査委員会は岩見広一氏の博士学位請求論文が本学博士を授与するに相応しいものと判断した。

【付録】 本論文に関連する著書、論文等

第1章

岩見広一（2004）. 協調できる社会をめざす 大坊郁夫（編）現在に生きる人のための心理学テキストブック わたしそしてわれわれミレニウムバージョン 北大路書房 pp.223-237.

第2章

岩見広一（1999a）. 脅迫文を伴う連続空巣狙い事件に対する犯罪行動分析 科学警察研究所報告防犯少年編、39、144-153.

岩見広一（2008b）. 犯行リズム分析による連続性犯の犯行予測 犯罪心理学研究、46（特別号）、213-214.

岩見広一（2013b）. 性犯罪経歴者の割合が高い年少者対象の性犯罪特徴について. 犯罪心理学研究、51（特別号）、160-161.

第3章

岩見広一・桐生正幸（1998）. プロファイリング研究の系譜（上）警察公論、53（9）、68-77.

岩見広一（2002b）. 国際捜査心理学会 笠井達夫・桐生正幸・水田恵三 2002 犯罪に挑む心理学—現場が語る最前線 北大路書房、pp. 52-53.

岩見広一（2006）. 行動科学的プロファイリング—わが国の現状と今後の課題— 犯罪心理学研究、44（特別号）、229-231.

岩見広一（2011b）. 日本の捜査現場におけるプロファイリング 犯罪心理学研究、49（特別号）、169-170.

岩見広一（2014b）. 犯罪者プロファイリングにおける推定規則の集積と理論化に向けて 犯罪心理学研究、52（特別号）、237-238.

第4章

研究1

岩見広一 (1999a). 脅迫文を伴う連続空巣狙い事件に対する犯罪行動分析 科学警察研究所報告防犯少年編、39、144-153.

第5章

研究2

岩見広一・横田賀英子・渡邊和美 (2003a). 性的な殺人の犯行形態及び犯人特徴 日本鑑識科学技術学会誌、8 (別冊号)、p.157.

研究3

岩見広一 (2016c). 放火殺人における犯行行動と犯人特徴の相同性. 応用心理学研究、42、121-129.

研究4

岩見広一 (2014a). 司法機関を対象とした放火の事件及び犯人特徴 犯罪心理学研究、52 (特別号)、98-99.

研究5

岩見広一 (2014c). 連続性犯罪者による同一場所再犯行の時空間特徴. 日本心理学会第78回大会発表論文集、488.

研究6

岩見広一 (2013a). 女性単独のコンビニ強盗犯に関する特徴 日本心理学会第77回大会発表論文集、443.

第6章

研究7

岩見広一 (2010). 金融機関強盗犯の属性と犯行移動距離 犯罪心理学研究、48 (特別号)、132-133.

研究8

岩見広一 (2013b). 性犯罪経歴者の割合が高い年少者対象の性犯罪特徴について. 犯罪心理学研究、51 (特別号)、160-161.

研究9

岩見広一・横田賀英子・渡邊和美 (2005). 犯罪手口に基づく被疑者順位づけシステムを応用した屋内強姦における犯罪者プロファイリングの方法 科学警察研究所報告犯罪行動科学編、42、80-87.

第7章

研究10

岩見広一 (2017). 連続コンビニ強盗犯の特徴と犯行地選択について. 応用心理学研究、42、257-258.

岩見広一・龍島秀広 (2005). 捜査支援を目的としたコンビニ強盗事件の局地的研究 犯罪心理学研究、43 (特別号)、98-99.

研究11

岩見広一 (2016a). 性犯罪における点分布パターン分析による地理的プロファイリング手法の比較. 応用心理学研究、42、30-39.

第8章

岩見広一 (2004b). 捜査意見書 高取健彦 (編) 捜査のための法科学—第一部 (法生物学・法心理学・文書鑑識) — 令文社 pp. 247-254.

岩見広一 (2006). 行動科学的プロファイリング—わが国の現状と今後の課題— 犯罪心理学研究、44 (特別号)、229-231.

岩見広一 (2008a). 連続性犯の犯行行程距離と地理的プロファイリング手法の検証 日本心理学会第72回大会発表論文集、434.

岩見広一 (2008b). 犯行リズム分析による連続性犯の犯行予測 犯罪心理学研究、46 (特別号)、213-214.

岩見広一 (2011b). 日本の捜査現場におけるプロファイリング 犯罪心理学研究、49 (特別号)、169-170.

岩見広一 (2013b). 性犯罪経歴者の割合が高い年少者対象の性犯罪特徴について. 犯罪心理学研究、51 (特別号)、160-161.

岩見広一 (2014b). 犯罪者プロファイリングにおける推定規則の集積と理論化に向けて 犯罪心理学研究、52 (特別号)、237-238.

岩見広一 (2016b). 研究と実務の融合—犯罪者プロファイリングをとおして— 日本応用心理学会第83回大会発表論文集、10.